

満州農業移民：

戦後集団再入植開拓村における

“きずな”と農民層分解

——熊本県旭志村東陽開拓団の事例——

熊本大学 蘭 信 三

本報告は、熊本東陽開拓団を中心として、満州農業移民が戦後集団再入植した開拓村落の引揚げ後の軌跡を、「満州体験」にもとづく「きずな」と農民層分解とから考察するものである。

(1) 社会学の分析対象としての満州農業移民

従来、満州農業移民は、昭和初期の農村（問題）研究や日本帝国主義の移民地（政策）研究などの一環として、おもに歴史学の研究対象となってきた。例えば、森芳三「昭和初期の経済更生運動と満州農業移民」（村落社会研究会 第二十九回大会課題報告、一九八一年）、満州移民史研究会編『日本帝国主義下の満州移民』龍溪書舎、一九七六年）などがその代表であろう。しかし、満州農業移民

は、昭和初期に生じた歴史上の出来事という側面だけにとどまらず、きわめて今日的課題の一つという側面ももっている。それは、いわゆる「中国残留日本人孤児」の問題からも窺えるし、また、それと表裏をなす多数の満州引揚げ開拓村落の存在からもうなすけよう。

満州農業移民の多くは、敗戦後に満州の開拓地から引揚げて「緊急開拓政策」のもとに、国内各地に本当の入植をしたのである。国内に再(本)入植した満州農業移民にとっても、満州は過去のものである。しかし、彼らの「満州体験」は「中国残留日本人孤児」によってのみ生々しく浮きあがらされるだけでなく、彼ら一人一人の心の中に生きつづけており、しかも、その共有する「満州体験」は開拓村の「きずな」でもあったのだ。満州引揚げの開拓村落は、その「きずな」と入植後の本当の開拓によってつちかわれた「きずな」とによって、戦後の経済変動のなかで身を寄せ合いながら生きてきたのである。そして、経済変動のなかで農民層が分解した今日においても、彼らの中で「満州体験」はなお色あせず、その「きずな」は生き続けているのである。

(2) 分析の枠組

満州農業移民への社会学からのアプローチはいくつか考えられよう。一つは、移民の出身地に関する移民母村論の系列によるものである。一つは、移民の意志決定過程に関するものであり、また、一つは、移住地へ適応、この場合は殖民としての役割・他民族との対応に関するものがある。それに、移住地からの引揚げ(一般にはUターン)後の生活に関する考察等が考えられる。本報告では、最後の側面にアプローチすることになる。

満州引揚げの開拓村落は、一般の伝統的村落とも異なるし、一般の

開拓村落とも異なる。関清秀がつとに指摘しているように(一九六三年)、開拓村は自然村と異なり歴史的背景のない新しい集団としての側面をもつし、他方、関孝敏らも言うように集団入植の場合には母村の文化的背景や社会構造が開拓村に影響を与えている点も見落とせない。満州引揚げの開拓団は、上の二つの側面に加え、「満州体験」という共通の体験をもつ。このような共通体験にもとづく開拓村内の「きずな」が戦後の農業状況にどのような影響をもたらしたかという側面は、満州引揚げの開拓団に固有なものである。しかも、それが分村移民という形態のものであれば、三つの側面を兼ね備えたことになる。

(3) 事例の概説

本事例の熊本東陽開拓団は、第九次(昭和十五年)の満州開拓団を母体としている。満州東陽開拓団は、分村移民が盛んな頃でありながら熊本県全域の十三郡三十六市町村からまんべんなく集まった県単位の開拓団であった。満州東陽開拓団は、北満の竜江省甘南県であった。同団は、満州において成功した(?)開拓団の一つと言われ、敗戦後もほとんど人的被害がなく引揚げてきた開拓団の一つであった。昭和二十一年に引揚げ、昭和二十二年に現在地熊本県旭志村に入植する。同開拓団は満州において六十一戸の世帯から成っていたが、そのおよそ半数が集団再入植した開拓村落である。この開拓団の特徴の一つは、きわめて信頼されたりダーが存在したことであり、このリーダーのもとに戦後の開拓を行なっていったのである。そして、昭和四十年代まではほとんど離農者も離村者も出さないという成果を出しながらも、四十年代後半から激しい農民層の分解におそわれている。

このような事例地区において、「満州体験」にもとづく[〃]きずな[〃]が開拓村落の社会構造や農民分解にどのような影響を与えたかを報告したい。